研修名　乳児保育・教育
平成３０年１月２９日（月）
１０：００～１２：３０
講　師　東京家政大学　増田　まゆみ 氏

１　講演要旨

１）映像を視聴して

言葉を話せない赤ちゃんが、母親との関わりの中で五感から刺激を受け、表情で会話し心を通わせることで心が発達していく。映像は、昔の外国での実験映像だったが、国も時代も違うのに大切なことは今も昔も変わらない。映像の中で、赤ちゃんが目の前にいる母親に笑いかけても、母親が無表情で反応しないという実験があった。赤ちゃんは、反応してくれないという刺激を処理するために顔を背けたりして刺激を和らげる。そして、再び笑いかけてサインを母親に向けて出すが、それでも母親が反応してくれないと、よだれや舌、しゃっくりが出るなど体に反応が現れる。赤ちゃんはサインを出すことを一度では諦めず、何度もサインを出す。しかし、それでも反応がないとサインを出すことを諦めてしまう。結果、表情が乏しく感情が発達しない。

２）乳児保育の現状と課題

①現状

・３歳未満児の保育は発達の特性からも個別の保育が核となり、緩やかな担当制（特定の保育士）をとることが望まれる。

・丁寧な継続性のある保護者への支援が必要である。毎日関わることで、子どもの育ちを楽しいと思えるなど、保護者に影響を与えられる。

②課題

・クラス規模、グループ規模、保育室や園庭のスペース、遊具、玩具のあり方と、保育士を中心とした多様な職員構成（看護師・栄養士など）での協働する保育のあり方を検討することが求められる。

３）乳児保育の基本

①保健的、安全に十分配慮した家庭的なくつろいだ環境の中で、主体としての乳児の生命が守られ、心身共に快適に過ごす。

・乳児への注意深い観察と記録が必要である。

・家庭的でほっとでき、集中して遊ぶことを可能にする保育室が求められる。現状をどう変えられるか検討する事も大切である。

②特定の保育者との継続的な、愛情深い関わりにより、人への基本的信頼感を形成する。

・柔軟な形でのグループ担当制（緩やかな担当制）を工夫することにより、特定の保育者との絆を基盤に次第に人との関わりを広げていく。

・担当制を取ることは、保護者と保育者との信頼関係を作り、親と協働して育ち合う上でも大切である。連絡帳や保育経過記録なども、継続的に子どもの育ちを記録することで、見通しをもって子どもと関わることにつながる。

③個への関わりを重視し、個人差に十分配慮して、主体としての乳児の基本的な欲求（生理的欲求や甘え・依存の欲求）を主体としての保育者が応答性をもって優しく、スキンシップを十分に取りながら満たすようにする。

・一人一人の発育・発達を的確に捉え、生理的欲求を単に満たすのではなく、スキンシップを十分にとりながらの優しく愛情深い保護や世話により、情緒の安定を図ることが大切である。

④乳児の生活が安定していくためのベースとなる睡眠と覚醒のリズムを確立し、健康的な生活リズムにしていく。

・家庭での生活リズムを把握しながら、次第に健康的な生活リズムになるよう、家庭との連携が大切である。

⑤情緒の安定を基盤に、乳児の自発的な活動を大切にする。

・姿勢・運動や感覚機能の発達を的確にとらえ、自発的な活動を生み出す応答的環境を用意することが保育者の役割である。

⑥家庭との連携を積極的に図り、１日２４時間を視野に入れた保育を進め、家庭と保育所とが協働して子育てに取り組む。

・いつもの保育の中に保護者が参加してもらえるよう工夫し、子どもとの共通の感動体験を通して、親も子どもも共に育つ場を提供することが必要である。

⑦保護者の就労等と子育ての両立を支援し、育児不安などを軽減し、子育ての楽しさを共有する。

⑧職員の協力体制を作り、共通理解とそれぞれの役割を認識して保育を進める。

・保育指針の第４章に提示されているカリキュラム・マネジメントが重要で、計画・実践・評価・改善の保育の過程の尊重と、研修等により専門性・人間性を高め、自分の園にあった保育の質・組織力を高める。

４）乳児保育の計画・記録・評価

①全体的な計画

保育の全体像を包括的に示すものとし、これに基づく指導計画等を通じて、各保育所が創意工夫して保育できるよう作成されなければならない。皆で見直し、話し合い、検討することが必要である。全体的な計画に基づき、具体的な保育が適切に展開されるよう、指導計画を作成することが必要になる。

②指導計画の作成

「３つのポイント」

・子どもの「しようとする姿（やりたいこと）」に焦点をおく

・保育者がどのように、子どもを受け止め関わったかを示す

・具体的な言葉や行動から、子どもの変化を保育者がどのように読み取ったかを伝える

評価は、保育の質を高めるために、まずマイナスの部分を反省することが大切である。

③１歳児以上３歳未満児の保育に関わるねらい及び内容

「３つの関わり」（個別の発達の配慮）

・大人との関わり

・身近にあるものとの関わり

・自分の心と体の関わり

を毎日の保育で積み重ねることで五領域へつながり、そして「幼児期の育ってほしい１０の姿」へつながる。

2　感想

今回の研修で、乳児期の毎日の積み重ねの保育・記録の大切さを改めて感じました。指導計画の書き方も教えて頂いたので、意味のある指導計画・記録の書き方をしっかりと身につけたいと思います。研修で学んだことを活かして、日々の保育・指導計画・記録の質を高められるよう努力していきたいと思います。

（記録　やまもも保育園　濵田幸）